

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

人びとが想像力のなかで世界を切りわけける仕方をかりに隠喩的な地理学とよんでおこう。これによって空間は意味をもった世界になる。そのひとつの例がギリシャ人たちのインドとアフリカ(このふたつは古代では混同されている)に対する認識にみられる。かれらはそこに怪物が住んでいると信じた。ギリシャ人たちが信じた怪物たちのイメージには、どのような系譜を辿ったにせよ一貫した合成法がある。解剖学的に人体をばらばらにし、それを再び正常ではない仕方で合成してつくりあげていったものである。この合成法は、のちにジャンバッティスタ・ヴィコが古代人の観念合成とよんだものと同質であり、かれのことはを借りれば詩的怪物である。ヴィコは、太古の人間の本性からそのような怪物が **A** に生まれてきた、と指摘する。

〔太古の人間は〕与えられたものから形相(本質)もしくは特質を抽象することができなかったからである。そこで彼らは、彼らなりの論理をもって(感覚的に)与えられたものを再構成してその形相(本質)を構成しようと試みたり、あるいは与えられたものを解体して、附属的な対立(形相)から本来的形相を分離しようとした。このような観念合成が詩的怪物を作り出したのである。〕

ヴィコの「詩的合成」はレヴィ・ストロースの「プリコラージュ」に近い。だがどうしてこのような詩的怪物がつくりだされねばならなかったのか。

ド・シャンポオとステルクスは、ギリシャ人たちにとっては自分が住み、しほは腰腰訪れる親しい領域のみが現実的な世界であり、かれらはそこで自己を人間として **B** する一方、親しくない領域、未知の、到達できない彼方は現実性がうすれるところであり、ついに人間が怪物にとつてかわられるような世界になると説明している。これは現実で確かめ、日常化できる領域のみが理性的認識と結びつき、それを超える領域は想像力に結びつくことを示している。また理性的な認識によって人間の美徳は積極的に構成される一方、その欠落は、視覚的身体の解体、変形によって自ずと示されるものであった。つまり怪物を生み出すことは、かれらが世界を自分たちの世界とそうでないものに分離し、世界を一種の隠喩的地理学としてテキスト化することにはかならなかったためであり、そのように世界をテキストに構成することは、自らのアイデンティティにとって根本的に重要であったのである。

すでにアレキサンダー大王の遠征があり、インドとの交渉は現実存在していた筈だし、ヘロドトスのインドの記述からうける印象を考えると、この人間／怪物という対立はほんらい怪物の存在を意味するのではなく、実は文化／非文化の対立と考えてもよいように思われる。だがこの「文化／非文化」として描かれる空間は客観的な観察、科学的な認識にはほど遠かった。隠喩的地理学は、ほんらいきわめて心的なものである。ルドルフ・ワイトコフワーが「ギリシャ人はかれらの本能的な怖れを、非宗教的な形式で、インドに住むと信じた怪物じみた人種や動物をつくり出すことで **C** した」といい、ロバート・ヒューズが「天国と地獄」のイメージについての論考のなかで、この怪物に言及し、甲「インドはヨーロッパのイドだ」とのべるのも、これら怪物をうむ想像力が汲みだされる源について暗示しているのである。それらは人間の心の影の部分であり、古代・中世の隠喩的地理学において人間の世界から排除される世界(インド)は、自らの影の空間的投影にほかならなかったのではないか。もしそうだとすれば現在もなお根強い人種差別は、古代の隠喩的地理学において、人間が抱いている暗く巨大な心的領域が空間化し、人格化して、もうひとつの世界をつくった心的現象の延長の上にあるのかもしれない。事実、ルネッサンス以後のアメリカ植民において、アリストテレスの「先天的奴隷説」がアメリカ・インディアンに対して適用されるのである。

こうした隠喩的な地理学と怪物は古代末期の科学的地理学のままで、一旦、消えるように見えるが、再び息をふきかえし、そのまま古代から中世へうけつがれる。ふたつの世界という考え方は、アウグスチヌスの『神の国』のなかにあられる。「一方は肉によって生きようとし、他は霊によって生きようとする」人びとからなる(十四編)。この **D** な分割は同時に空間的な分節、いわば隠喩的な地理学と結びついていた。アウグスチヌスは太陽に灼かれてわれわれが生きられない場所についても語っている。十六編にいたって、「アダムの家族、またはノアの子孫が巨怪物を生み出したのだろうか」と題して、古代の抱いたイメージとキリスト教の教義を和解させなければならなくなる。アウグスチヌスは、もしそれが存在し、しかも人間であるなら、それもアダムから出たものである、神が全体のためにつくったもので神の叡智の失敗ではない、と論じたのである。アウグスチヌスのテキストが描くイメージ

・ムンディ（世界像）は古代的な隠喩的地理学の空間に重なっていた。この考え方は中世にうけいれられる。こうして中世に生きのびた怪物たちはいわば闇の世界からあらわれて、中世の寺院建築の装飾彫刻に視覚化されたのである。たとえばサンスのカテドラルには一本足のスキアポツド^(注6)が彫られ、ヴェズレーの聖マドレーヌ寺院のタンパン彫刻には耳の大きな怪物、犬頭などが刻まれている。ロバート・ヒューズが指摘するように、ヴェズレーのタンパン彫刻は耳的隠喩として最初に解釈したのは偉大な図像学者エミール・マールである。マールがそこに発見した地理学はキリスト教的世界観に合理化され、怪物といえども神の被造物であり、キリストの教えをうけるべきすべての民族のひとつとして位置づけられ、描かれていたのである。この怪物たちがそれぞれ中世末期には、特定の道徳的な罪を代表するアレゴリーとなるのも、もともと、それが人間の美德への問いと結びついてその対蹠点^{トポス}に発生したものであったことを考えれば全く不思議ではない。これら罪の寓意としてのイメージは、ボツシユ^(注7)やブリュエゲル^(注8)によって描かれはじめる地獄、地下世界を充たす住人になっていく。中世を通じて、理性の彼方のもうひとつの世界としての怪物も生きつづけるが、同時に天国／地獄というかたちでの水平的地理空間の垂直化が生じ、同じ怪物が別の空間テキストへ棲みかえてもいたのである。

（多木浩二『眼の隠喩』より）

注1 ジャンバッティスタ・ヴィコ（一六六八～一七四四）イタリアの哲学者。

注2 レヴィ・ストロース（一九〇八～二〇〇九）フランスの社会人類学者。

注3 ド・シャンポオとステルクスともに二〇世紀の美術史家。

注4 ルドルフ・ワイトコウワー（一九〇一～一九七二）ドイツの美術史家。

注5 ロバート・ヒューズ（一九三八～二〇二二）アメリカの美術史家。

注6 スキアポツド 古代ギリシャ人が想像した一本足の怪物。

注7 ボツシユ（一四五〇頃～一五一六）北ネーデルラント（現在のオランダ）の画家。

注8 ブリュエゲル（一五三〇頃～一五六九）ブラバント公国（現在のオランダ）の画家。

問一 空欄

A

D

に入る最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| A | イ | 具体的 | □ | 現実的 | ハ | 感覚的 | ニ | 意図的 | ホ | 必然的 |
| B | イ | 理想化 | □ | 客観化 | ハ | 可視化 | ニ | 一般化 | ホ | 活性化 |
| C | イ | 多様化 | □ | 形骸化 | ハ | 合理化 | ニ | 抽象化 | ホ | 無力化 |
| D | イ | 客観的 | □ | 相対的 | ハ | 精神的 | ニ | 感情的 | ホ | 独断的 |

問二 傍線部甲「インドはヨーロッパのイドだ」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。「イド」は精神分析学の用語

- イ ヨーロッパ人が意識下で許容できない暗黒面を、他者であるインド特有の属性とみなすこと
- ロ ヨーロッパとインドは、文化と非文化という二項対立によってのみ理解されるということ
- ハ ヨーロッパの罪悪感を空間としてとらえたものがインドであるということ
- ニ ヨーロッパ人はインド的世界を自分たちの視点で相対化したということ
- ホ ヨーロッパの中世以降の文化の源泉はインドにあるということ

問三 傍線部乙「古代の抱いたイメージとキリスト教の教義を和解させなければならなくなる」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 中世のキリスト教建築において、さまざまな怪物が装飾として使われている矛盾に対し、合理的説明を加えなければならなかったということ
- ロ キリスト教の世界観の中で、地獄という概念が確立するに伴い、その住人としての存在が必要となり、怪物が利用されたということ
- ハ 聖書に描かれる登場人物たちの罪によって怪物たちが誕生せざるをえなかった、という事柄に対し理解を示すこと

二 中世以降のキリスト教神学において、怪物さえもキリスト教的世界観の中に場所を与えなければならなくなつたということ

ホ ひとたび消滅しかかった怪物を復活させることで、人間の生を活性化させる可能性を広げたということ

問四 本文中、繰り返し言及されている「隠喩的な地理学」の内容に合致しないものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 具体的な空間認識ではなく内面的作用としての世界観
- ロ 自分たち以外の世界は何かが欠落しているとみなす思考
- ハ 世界を文化と非文化の二項対立で考える空間認識
- ニ 神話的世界観と科学的世界観に分ける方法論
- ホ 空間を象徴的イメージで捉えようとする態度

問五 本文の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 古代ギリシャ人たちが感じていた、野蛮な存在に襲撃されるかもしれないという恐怖が、辺境の地に棲む怪物というイメージを作りあげた。
- ロ 太古の人間が、与えられたものから本質を抽象できなかつたのは、自分たち以外の世界に対する想像力を欠いていたからである。
- ハ アレキサンダー大王の遠征は、人間世界における文化と非文化という対立の構造をよく象徴している。
- ニ 古代ギリシャ人たちが作りだした怪物たちは、先天的に自分たちよりもはるかに劣るものが存在するという考えの基本となった。
- ホ 中世においては、怪物といえども、神の被造物である以上、その存在は人間と同格のものとして許されるべきであると考えられた。
- ヘ 古代において、地続きの空間に生きていた怪物たちは、中世に入って、天国に対する地獄の住人という縦の関係でも捉えられるようになった。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

そのとき、横の裂けたモンペから、毛糸の赤い腰巻が見えた。そして彼は、そのおかねへ女を感じている。
(一九四八)

今から五十年くらい前に書かれた日本語というのは、どんなものだろうと思つて、ある小説を開いて見たら、こんな文章が目飛び込んできたので、びっくりした。ひよつとしたら、こんな風に手当たりしだいに目についた本を手に取つては、めくつていったら、日本語というモンペが次々と裂けて、赤い腰巻などが見えて、何度もびっくりさせられるかもしれない。時間を無意味に飛び超えてみると、急に赤いものが見えることもあるものだ。勝手なことを考えながら、飛び石を渡るつもりで遊べば、面白いことも発見できるだろう。

いや、日本の女は若いうちは何ほハイカラがっても、年を取つて来たら結局洋服はよう着んようになるねんで。こいさんなんかもうお婆さんになった証¹コや。(一九四八)

それにしても、なんと遠い世界のことのように聞こえるのだろう。これが自分が生まれるたつた十五年くらい前に書かれた日本語かと思つと、信じられない。遠い世界のもののように感じられるのは、腰巻や着物という布のかたちそのものではない。日本語が、ゆつたりとした衣服のように、文学を取り巻いているように感じられる、そのゆるやかさが、遠い昔のことのように感じられるのだ。それは、肌に密着することなく、縫われたものの誇りをシワやヒダにして、はつきりと表現している。

失われていった日本の衣服のことを考えながら、わたしは、衣服としての日本語のことを考えていた。女性の衣服について言えば、それを脱がしてしまうというつまらない幻想は、いつ頃日本に入ってきたのだろう。なぜ、つまらないかと言うと、そこには、**A** であつて、それに対応する **B** がある、というような考え方が臭っているからだ。「衣」を「言葉」に置き換えて考えてみると、言葉は内容を引き立たせたりもするが、隠してもいるわけだから、なるべく目立たないほうがいい、ということになつてしまう。

女が仏倒しに雪の上に仰向けに倒れた。炎いろの裾が裂けて、雪に白い素肌の腿がひろがった。(一九五六)

毛糸の赤い腰巻が内部に見えていた頃は、衣の下にあるものもまた衣だった。ところがここでは、衣の下に素肌が見えてしまつている。^甲素肌という言葉は、今日でも、化粧品のコマーシャルなどによく使われるが、救いようのない日本語だと思つ。さて、この素肌の女に対応する男を見てみると、これも仕方のない男だとしか言いようがない。

父の国民服の胸にかけられた袈裟^{けさ}を見、血色のよい若い下士官たちの金釦^{ボタン}をはね上げているような胸を見た。私はその中間にいるような気がした。(一九五八)

C ので、通俗的な感じがする。ふたつのアイデンティティを右と左に置いて、自分はそのどちらでもないと言っているのは、裸の自分というものがあると主張したがっているということかもしれない。そしてその一見ハダカ²の彼は、直立不動の姿勢を取っている。エイ兵²か銅像のようだ。

これが、「直立不動の日本語」ならば、「道端に倒れている日本語」が、それに対抗して出てきても不思議はない。倒れている身体を衣服が包んでいる。それどころか、ここで倒れている身体は、衣服だけから出来ていて、中味が **X** であるような印象さえ与える。

エル・バーラムの体は黒いアスファルトの上に、緑色のシャツと、紺のズボンに覆われた堆積のようだった。倒れたことを静かに主張していた。(一九五七)

人（エル）も道（アスファルト）も服（シャツ、ズボン）もカタカナに変わってしまったて、人は衣服の堆積のように投げ出されている。ただ、色彩だけが、黒、緑色、紺、と漢字で重たく記されている。身体よりも衣服が、衣服よりも色彩の方が重いアンバランスな風景に共感が持てる。

それとは逆に、衣服が素肌を隠し、その衣服が剥がされるときが **Y** の時であるという、通俗的な図柄は、ポルノ小説に吸収されていった。ポルノ小説にとつては、日本語という衣もまた、脱げるものなら脱いでしまいたいもので、できるだけ気にならない薄いものが良いということになるのだろう。

でも、衣服を脱いだくらいで裸のすさまじさが現われると考えるのは甘い。そうではなくて、たとえば、顔を塗りたくったり、仮面を被ったりすると、裸が現われてくることもある。ちょうどその頃、衣服によって隠されることになった顔を³ト料で隠し、逆に身体は全く隠さずに裸で、自殺した者があつた。

この夏の終りに僕の友人は朱色³のト料で頭と顔をぬりつぶし、素裸で肛門に胡瓜をさしこみ、縊死したのである。（一九五七）

これは、衣服によって隠されることのなかった顔という場所に厚く衣装を被せる日本語であるとも言える。こ²ういう日本語は、めずらしい。こ²ういう日本語が可能だということ自体、それまで誰も知らなかったのではないか。

いずれにせよ、言語は肌³に違和感を残すものである。それをごまかすのが文学ではないことだけは確かだ。日本語自身³が、自分の衣服としての違和感を意識し、それが滑稽なほど明確に現われるのもよい。

ぼくは今、この記録を箱のなかで書きはじめている。頭からかぶると、すっぽり、ちょうど腰の辺まで届くダンボールの箱の中だ。（一九七三）

書き手は、ダンボールの中で書いているのではなく、言葉をダンボールのように使って、書いているのではないか。そんな **Z** が、文体にある。ダンボールというものは、厳密に言えば、服の一種と言うよりは、家の一種と言うべきかもしれない。でも、その家にはひとりしか入れないし、その家は身体に付いてまわる、服のような家なのだ。

（多和田葉子『カタコトのうわごと』より）

問六 傍線部1～3にあたる漢字がカタカナ部分に使われている語をそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|---|----|---|---|----|---|---|----|---|---|----|---|---|---|---|
| 1 | イ | コ | 別 | □ | 根 | キ | ヨ | ハ | 凝 | コ | ニ | キ | ヨ | 動 | ホ | キ | ヨ | 住 |
| 2 | イ | エイ | 業 | □ | エイ | 霊 | ハ | エイ | 角 | ニ | エイ | 華 | ホ | エイ | 生 | | | |
| 3 | イ | ト | 中 | □ | ト | 露 | ハ | ト | 歩 | ニ | ト | 布 | ホ | 企 | ト | | | |

問七 空欄 **A** と **B** に入る最も適切な言葉の組み合わせを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | |
|---|---|---------|---|---------------|
| イ | A | 肌こそが基本 | B | 誇張するものとしての衣 |
| □ | A | 衣が重要 | B | 表層的なものとしての肌 |
| ハ | A | 衣は外見 | B | 本質的なものとしての肌 |
| ニ | A | 衣こそが主眼 | B | 副次的なものとしての肌 |
| ホ | A | 肌は女性の原点 | B | 取り去るべきものとしての衣 |

問八 傍線部甲「素肌という言葉は、今日でも、化粧品のコマーシャルなどによく使われるが、救いようのない日本語だと思う」は、筆者のどのような価値観を反映しているか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 素肌という言葉は、化粧品を売るために作られた商業主義的な言葉なので、文学的ではない。
- ロ 素肌という言葉は、衣の下にも衣があるべきだという考えを押しつけているので、傲慢である。
- ハ 素肌という言葉は、肌があたかも貧相であるような表現なので、コマーシャルに使うには効果的ではない。
- ニ 素肌という言葉は、衣が目立たないほうがよいという印象を与えるので、時代遅れである。
- ホ 素肌という言葉は、肌を最も飾りのないものとして規定している言い方なので、認識として凡庸である。

問九 空欄

C

は直前の引用を説明している箇所である。ここに入る最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人物の肉体描写を用いて、主人公のアイデンティティを示している
- ロ いわゆるアイデンティティが、衣を比喻として取り扱われている
- ハ 現代に存在しなくなった服が、人物のアイデンティティとして使われている
- ニ 服の下にある肉体の重厚さが、過度に誇張されている
- ホ 登場人物の服が、微に入り細に入り描かれている

問十 空欄

X

Z

に入る最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

- X イ 非在 ロ 不在 ハ 空疎 ニ 無意味 ホ 虚無
- Y イ 窮地 ロ 絶対 ハ 現実 ニ 危機 ホ 真実
- Z イ のんかさ ロ かなしみ ハ むなしさ ニ おかしみ ホ ありさま

問十一 傍線部乙「こういう日本語は、めずらしい」の理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 死を軽く扱いついでるので日本語の小説としては珍しいと考えている。
- ロ 読者に与える違和感が強すぎるので評価はしているが敬遠している。
- ハ 顔が衣服になっているという点で珍しいのでよいと思っている。
- ニ 突飛な内容に見合った違和感を残す文体を高く評価している。
- ホ 内容が現実的ではないが日本語の使い方は賞賛している。

問十二 本文の主張に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 文の内容が文体よりも重要だという考えはつまらない。
- ロ もう使われなくなった言葉を文学で使うことは、いけないことではない。
- ハ 文学においては、中味(内容)と表面(文体)とは切り離すことができない。
- ニ 五十年前の日本語に接することによって、人々は文学の豊かさを認識することができる。
- ホ 日本語に対する違和感を大切にしないと、逆に正しい日本語を保持することができない。
- ト ある言葉や文章を一読して感じる違和感は、文学にとって排除してはならないものである。
- ト めまぐるしい現代において、文学を通してゆるやかな日本語に触れるのは重要なことである。

(三) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

よしいえといひける宰相のはらから、大和の掾(注)といひてありけり。これがもとの妻のもとに、筑紫より女を率て来てすゑたりけり。もとの妻も、心いとよく、今の妻もにくき心なく、いとよく語らひてゐたりけり。かくてこの男は、ここかしこの人の国がちにのみ歩きければ、ふたりのみなむゐたりける。この筑紫の妻、しのびて男したりける。それを、人のとかくいひければ、よみたりける。

夜はにいでて月だに見ずはあふことを知らずがほにもいはましものを

となむ。かかるわざをすれど、もとの妻、いと心よき人なれば、男にもいはでのみありわたりけれども、ほかのたより、「かく男 A」と聞きて、この男思ひたりけれど、心にもいれで、たださるものにておきたりけり。

さて、この男、「女、こと人にもいふ」と聞きて、「その人とわれと、いづれをか思ふ」と問ひければ、女、

花すすき君がかたにぞなびくめる思はぬ山の風は吹けども

となむいひける。

よばふ男もありけり。「世の中心愛し。なほ男せじ」などいひけるものなむ、この男をやうやう思ひやつきけむ、この男の返りごとなどしてやりて、このもとの妻のもとに、文をなむひき結びておこせたりける。見ればかく書けり。

身を愛しと思ふ心のこりねばや人をあはれと思ひそむらむ

となむ、こりずまよみたりける。

かくて、心のへだてもなくあはれなれば、いとあはれとおもふほどに、男は心かはりにければ、ありしごとあらねば、かの筑紫に親はらからなどありければいきけるを、男も心かはりにければ、とどめ B なむやりける。もとの妻なむもろともになりならひにければ、かくていくことを、「いと悲し」と思ひける。山崎にもろともにいきてなむ、舟に乗せなどしける。男も来たりけり。このうはなりこなみ、ひと日ひと夜、よろづのことをいひ語らひて、つとめて舟に乗りぬ。いまは男もとの妻は帰りなむとて車に乗りぬ。これもかれも、いと悲しと思ふほどに、舟に乗りたまひぬる人の文をなむもて来たる。かくのみなむありける。

ふたり来し道とも見えぬ浪の上を思ひかけでもかへすめるかな

といへりければ、男も、もとの妻も、いといたうあはれがり泣きけり。漕ぎいでていぬれば、え返りごともせず。車は舟のゆくを見てえいかず、舟に乗りたる人は、車を見るとおもてをさしいでて、漕ぎゆけば、遠くなるままに、顔はいとちひさくなるまで見おこせければ、いと悲しかりけり。

(「大和物語」より)

注1 大和の掾 大和国の国司の三等官。

注2 うはなりこなみ 後妻と本妻。

問十三 傍線部 a「よしいえといひける宰相のはらから」と同一人物をさしていない語句を、文中のイ〜ホの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

問十四 空欄 A

A

に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ すらむ ロ すなり ハ すべし ニ せむ ホ しけむ

問十五 傍線部 b、f の「ふたり」はそれぞれ誰をさすか。次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 男ともとの妻
- ロ 男と筑紫の妻
- ハ もとの妻と筑紫の妻
- ニ 筑紫の妻と恋人
- ホ 筑紫の妻とはらから

問十六 傍線部 c 「思はぬ山の風は吹けども」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 急にあなたから非難されて動揺していますが
- ロ 思いがけず他の男性から言い寄られています
- ハ 世間の人々から思いも寄らぬ仕打ちにあっています
- ニ 唐突な質問をされて自分でもはつきりわかりませんが
- ホ 自分のことを思ってくれない人からひどい仕打ちを受けましたが

問十七 傍線部 d の和歌「身を愛しと思ふ心のこりねばや人をあはれと思ひそむらむ」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 我が身を哀れと思う心が残っていたらいいのに。こんな人に恋心を抱いてしまったことよ。
- ロ 私につれない夫の態度をつらいと思う気持ちが強まったせいで、人の世の哀れが強く感じられるようになったことよ。
- ハ 自らをかわいそうに思う気持ちが残っているせいで、言い寄ってくれる人を素晴らしいと思ってしまうのだらうか。
- ニ 情けない我が身をいとわしいと思う心が懲りていないせいで、またほかの人を愛しく思い始めてしまったのだらうか。
- ホ 我が身を愛しいと思う気持ちが残っていたらいいのに。そうしたら、浮気な男に気持ちが動いたりすることはないだらう。

問十八 空欄 B に入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ て
- ロ で
- ハ に
- ニ ぎら
- ホ つつ

問十九 傍線部 e 「いと悲し」と思ひける」について、「思ひける」の主体は誰か。次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ もとの妻
- ロ 筑紫の妻
- ハ 男
- ニ 筑紫の親はらから
- ホ 舟の漕ぎ手

問二十 傍線部 9「漕ぎいでていぬれば、え返りごともせず。」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 別れを惜しんで歌を詠んではみたが、舟が出てしまい、舟の女は送るすべもなかった。
- ロ 女がことわりもなく、舟を漕ぎ出して去ってしまったので、車の二人は返事もしなかった。
- ハ 筑紫に帰る女は何か言いたかったが、舟が漕ぎ出して行ってしまったので、手紙に返事もしなかった。
- ニ 歌を見て夫の真意に気づいたが、舟を出してしまっていたため、筑紫に帰る女は返事もできなかった。
- ホ 歌を見て返歌をしたかったが、舟がすでに漕ぎ出してしまっていたので、車の二人は返事もできなかった。

問二十一 本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ もとの妻は気の良い人だったが、筑紫の妻の浮気癖にあきれて忠告した。
- ロ 男は筑紫の妻が浮気をしているのを知って、筑紫の妻への愛情が冷めた。
- ハ 筑紫の妻の恋人である男は結婚を望んでいて、その思いを和歌で訴えた。
- ニ もとの妻と筑紫の妻とは、互いに親しくしており、友情で結ばれていた。
- ホ 男は筑紫の妻を、親・兄弟のもとへ帰してしまったが、あとで後悔した。

〔以下 余白〕